

# 東アジア海域と倭寇

—— 9 世紀末の新羅海賊との比較史的考察を通して ——

近 藤 浩 一

## 目 次

はじめに

1. 明帝国の海禁政策より見た倭寇の性格
2. 高麗を襲った倭寇の実像をめぐって
3. 元末明初・舟山群島の海上勢力と高麗・倭寇一鎮浦口に集結した倭寇と関連して一
4. 9 世紀末の新羅海賊との比較史的考察

おわりに

キーワード：倭寇，東アジア海域，高麗，武士団，新羅海賊

## はじめに

初めに本稿の目的を述べれば、14 世紀中葉～15 世紀の東アジア海域において倭寇がいかなる存在であったかを、先学の研究に学びながら明らかにすることにある。周知のように倭寇は、朝鮮・中国側の呼称であるが、庚寅年（1350 年）～15 世紀の朝鮮半島を襲撃した前期倭寇と 16 世紀の中国人密貿易商人とみられる後期倭寇では性格が大きく異なっており、本稿では前期倭寇（以下、倭寇と記載する）のみを対象とする。

実のところ私は、専門が朝鮮古代史であるためこれまで倭寇との接点はなかったが、一昨年に李領氏が 9 世紀の新羅海賊に対して倭寇との比較史的考察を行っている論稿<sup>1)</sup>を読み触発されて、新羅人の海上活動を多様な角度から研究するためには倭寇の勉強が必要であることを悟った。そうした折、昨年 7 月に全南大学校世界韓商文化研究団から国際学術会議『東アジアの海上活動とグローバル・ディアスポラ』で倭寇についての報告の依頼を受け行ったことで、本格的にその研究を始める契機となった<sup>2)</sup>。しかしながら、当初は倭寇に先駆けて東アジア海域を股にかけて活動した新羅商人や新羅海賊との比較史的考察により倭寇の性格がいくらか解明できると考えていたが、勉強を進めるにつれ倭寇にはこれまで重層な研究史があり、それを専門とする研究者も多く門外漢の私が安易に論じることも難しいことがわかってきた。

特に新羅海賊の研究にみられない難解な点は、倭寇に対する認識が日韓の研究者の間で大きく異なっていることが挙げられる。なかでもその主体（民族構成など）については、活発な議論が展開されている。日本側では、当初は日本の武装商人・海民集団のように説明されてき

だが、田中健夫<sup>3)</sup>・高橋公明<sup>4)</sup>氏により高麗人主体説もしくは済州島を中心とする高麗人との連合説が提起されて以降、その様相が大きく変化した。これについては村井章介<sup>5)</sup>氏や浜中昇<sup>6)</sup>・李領<sup>7)</sup>氏などが疑問を投げかけたが、現在の日本で倭寇研究の重鎮である村井氏は田中・高橋氏の説を批判的に継承し、倭寇を境界人（マージナルマン）と位置付け、現在の民族概念にとらわれない倭語・倭服を用いて日本人とは異なる共通の文化基盤を持った集団と提起した。村井氏の説は、関周一<sup>8)</sup>や佐伯弘次<sup>9)</sup>氏など近年の倭寇研究をリードする日本側の諸氏にはほぼそのまま受け継がれており、日本側の倭寇に対する認識は、朝鮮半島や中国を侵寇した集団よりは国家に縛られず東アジア海域を股にかけて活動した国際人とみなす傾向が強い。

一方、韓国側では、倭寇を一貫して高麗・朝鮮を襲撃した日本人とみている<sup>10)</sup>。韓国側の研究で特徴的なことは、日本側では倭寇の出現を明確に論ずることは避けているが、李領氏を中心とする韓国側の研究者は、日本人研究者よりも倭寇が活動した時期の日本国内の動向を緻密に分析し、それと結び付けて説明している点である。詳細は後述するが、倭寇の実体は九州地方の武士団（地域権力、広い意味で日本側の公的権力）であって、日本国内の内乱期に兵糧米などの不足を補うために高麗を襲ったとしている<sup>11)</sup>。それゆえ倭寇に対する認識も日本人のみの専門盗賊集団であり、彼らの国際性・多様性はほとんど言及されていない。

ところで、日本側における倭寇研究者の大半は、日本中世史を専門としながら倭寇については海域史の側からアプローチしようという立場である<sup>12)</sup>。そのためか、倭寇＝日本人（九州の有力武士団）とみる韓国側の研究を一国至上主義と批判的なことはもとより、倭寇の国家を超えた多様性を強調したいため、例えば倭寇の実体を特定して論ずることも避けている。しかしながら、私は新羅商人・新羅海賊の実体についていくらか検討したことがあるが、これらと公的な権力の関係を鑑みても、倭寇＝公的権力と無関係な自由人（境界人）が果して高麗国家を脅かす集団を形成できたのかという疑問を抱いている。また昨今、海域史という視点が強調され倭寇もそれに合わせて検討することの必要性が唱えられているが<sup>13)</sup>、倭寇が出没した時期の東アジア海域の動向と関連して検討されたものもそれほどみられない。

本稿では、私の専門とする新羅海賊との比較史的な側面も取り入れながら、既存の研究で議論的となっている倭寇集団の性格を検討したいと思う。

## 1. 明帝国の海禁政策より見た倭寇の性格

庚寅年（1350）より活発化した倭寇は、その数年後には中国沿岸部にも出没した<sup>14)</sup>。次の史料など<sup>15)</sup>によると、

### 史料 1

倭人寇蓬州，守将劉暹擊敗之。自十八年以来，倭人連寇瀕海郡县，至是海隅遂安。（『元

史』卷46順帝本紀9至元23年(1363)8月丁酉朔条)

元末期の1358年～63年頃、倭人(倭寇)が連年瀕海郡県(山東半島登州蓬萊県)を襲ったという。ここは税糧を輸送する海運船が江南から大都へ向かうルートであり、倭寇は当初からそうした情報を得て行動していたと推察される。それに対し元政府は、元末の江浙地方は中央の力が直接及ばず方国珍などの海上勢力が実権を握っていたが<sup>16)</sup>、1356年に一端元朝に帰服した方国珍を「海道運糧漕運万戸兼防禦海道糧漕万戸」に任じて、当地域の海上統制並びに海運船の護衛を委託させた。つまり、江浙地方における倭寇討伐の使命は方国珍政権が担っていたのである。1362年には、方国珍の部下の劉仁本が護衛の海運を襲った倭寇を撃退したという記録<sup>17)</sup>がみられる。

このように中国海域でも倭寇が活発化した最中、1368年に朱元璋によって明が建国された。朱元璋は、上に述べた倭寇退治を担当した方国珍などのライバルを蹴落として中国を統一したのであった。明帝国は当初から倭寇への対応を迫られたが、このことは倭寇の性格・主体を検討する上で看過することができない。次の『明史』卷91兵3海防条及び『明太祖実録』洪武4年(1371)12月丙戌条は、それを直接示唆している。

#### 史料2

洪武四年十二月、命靖海侯吳禎、籍方国珍所部温・台・慶元三府軍士及蘭秀山无田粮之民。凡十一万余人。隸各衛為軍、且禁沿海民私出海。時国珍及張士誠余衆、多鼠島嶼間、勾倭為寇。(『明史』卷91兵3海防条)

明政府は1371年12月に、倒した方国珍・張士誠の残党が倭人と結合することを怖れて、温州・台州・慶元(浙江省)や蘭秀山など沿海の海民を戸籍に登録しつつ、彼らが個人的に出海することを禁じた海禁政策を出している。明が倭寇の存在を持ち出したのは海禁と戸籍編成を実施するための口実でもあったが、その前後の時期の史料3などをみても、明が倭寇に対して国家体制(内憂と外患)を崩壊させる存在と考えていたことは相違ない。とすれば倭寇の主体が、農民や海民からなる単なる盗賊集団でないことは明らかであり、恒常的に中国沿海部を往来し海賊行為を働いただけでなく、反明活動を展開した権力の媒体と結びつき明帝国への抵抗勢力に転化する可能性もありえたことが想起される。

明帝国の倭寇問題と関連して、次の史料を参照しながら興味深い点を指摘しておきたい。

#### 史料3

①是月倭夷寇山東、輒掠温・台・明州傍海之民、遂寇福建沿海郡県。(『明太祖実録』洪武3年(1370)6月条)

②初方国珍拠温・台・処，張士誠拠寧・紹・杭・嘉・松・通・泰諸郡，皆在海上。方・張既降滅，諸賊強豪者悉航海糾島倭入寇，以故洪武中，倭数掠海上。（『皇明四夷考』卷上）

①は江浙地方へ現れた倭寇の初見であるが、ここにあるように元来山東半島を中心に活動した倭夷（倭寇）は、この時より明州方面に転じたといえる。これを手引きしたのは、史料2や②のように方国珍・張士誠などの残存海上勢力であった。さらに、それらの配下にあった諸賊の強豪なる者（舟山群島の海上勢力）は、独自に日本に渡航して倭寇と結託し、彼らと呼び寄せてその地域一帯で海賊行為をしたことが窺い知られる。

ところで方国珍などは、前述のようにこれより数年前までは倭寇を討伐する地位にあった。これをいかに考えるかであるが、元末期の方国珍などの海上勢力は「海道運糧漕運万戸兼防禦海道糧漕万戸」の地位を活用して<sup>18)</sup>、表面的には倭寇退治をしながらも自身のもとに倭寇などともネットワークを築いていったと推察される<sup>19)</sup>。倭寇側にとっても方国珍政権など地域権力と結びつくことは、山東半島での海運船襲撃を含む海上活動を展開する上でも有利に働いたと考えられる。むしろ、そうした国家情報を得るためには、公的権力との接触が不可欠であったのではないか。私の専門である9世紀代の山東半島の例をみても、海賊たちは李氏一族をはじめとする公権力である節度使の保護を得ることで、東アジア海域で奴隷貿易などの諸活動を円滑に展開することを可能にしたのであった<sup>20)</sup>。これらを勘案すれば、倭寇は明の建国直後には以前からの方国珍の残党勢力との結びつきにより、活動拠点を反明勢力の集まる江浙地方に移したとも理解できる。この江浙地方の海上勢力と倭寇の関係は、史料13に洪武24年（1391）になっても海盜の張阿馬が倭寇を率いて入寇し官軍がこれを撃退したという記録がみられるため、東シナ海を挟みながらも当分の間継続していたとみられる<sup>21)</sup>。ともあれ、倭寇が方国珍などの海上勢力とネットワークを有しており、明帝国がその対策に迫られていたことは確かめられた。

さらに、明が倭寇の活動をいかに深刻に受けとめていたかは、建国直後から高麗に倭寇の取り締まりを何度も直接要請していることでもわかる<sup>22)</sup>。倭寇は元末期から高麗経由で中国沿岸部に現れることが多かったようであるが<sup>23)</sup>、恭愍王を封じ高麗王となした1370年に明使節が持参した璽書には、倭寇退治のために軍備の増強の必要性を強固に説いている<sup>24)</sup>。明は1373年にも一層具体的な倭寇退治策を提示し<sup>25)</sup>、何より同年に高麗が倭船（倭寇）を攻撃するために明の中書省に移咨して火薬などの提供を請願<sup>26)</sup>すると、それを許可している<sup>27)</sup>。火薬などの軍備品は国家の最高機密事項の一つであるにもかかわらず、他国の高麗にこれらを頒布・教示したということは、明帝国の倭寇対策への意思と倭寇の主体勢力を想起させるのに十分である。この火薬が大きな威力を発したのが、次章で述べる史料6の倭寇との最大の戦闘である1380年の鎮浦口戦闘であった。下線部をみれば、製造した火砲を初めて用いた高麗軍は、賊船を壊滅させるのに大打撃を与えたと記されている。

## 2. 高麗を襲った倭寇の実像をめぐって

上では、中国海域における倭寇の登場及び明帝国建国期の倭寇問題を簡単に論じたが、これにより倭寇は何らかの公的権力との接触を試みていたことが読み取れた。ここではこれを踏まえて、本来なら前後逆になるが朝鮮半島に出没した倭寇の実像にいくらか迫ってみたい。

高麗では、次の史料の下線部のように、

### 史料4

倭寇固城・竹林・巨濟，合浦千戸崔禪・都領梁瑄等戰破之，斬獲三百餘級，倭寇之侵始此。（『高麗史』卷37 忠定王2年（1350）2月条）

庚寅年（1350）から倭寇の活動が本格化しその被害に苦しめられていた<sup>28)</sup>。前述の通り既存の研究のなかでも、この倭寇の主体を最も具体的に論じたのは李領氏である。李領氏は、それ以前の倭寇（13世紀の倭寇）との違いを明確にして、その規模や頻度が以前と比較できないほど拡大した1350年以後から1391年の高麗滅亡までの倭寇を〈庚寅年以降の倭寇〉と命名し、倭寇による高麗での略奪行為は、日本の南北朝の抗争を背景に一律日本人の専門的武装集団（中世武士団・悪党）が携わっていたとした。具体的な目的には、その始まりの1350年の倭寇は観心の擾乱に伴い筑前・対馬守護兼大宰少弐であった少弐氏（少弐頼久）が兵糧米など軍備品の確保にあたったためとし、禰王3年（1377）の倭寇にいたっては北朝軍の激しい攻撃を受けた南朝勢力下にあった松浦党が食糧の確保はもとより一時的避難の場所としたことを挙げている<sup>29)</sup>。

冒頭で述べたように、倭寇の活動を地域権力である九州の武士団と連結させて考える姿勢は、日本側（特に海域史に携わる日本中世史研究者）では、倭寇＝高麗・朝鮮人主力説をとらない者であっても日本の役割を過大視するとして批判的である。その日本人研究者の多くは、倭寇の主体を名門武士団の配下とみるよりは、『朝鮮王朝実録』などに度々出てくる「三島之倭寇」の三島（対馬・壱岐・松浦）の海民や『太平記』卷39「高麗人来朝事」にみえる「四国九州の海賊共」・「島嶼居民（征東行中書省牒）」、高麗使羅興儒帰国時の室町幕府の書簡にみえる「西辺海道頑民」<sup>30)</sup>のような首領を中心に離合集散を繰り返した集団という程度に理解しているようである<sup>31)</sup>。近年は日本側でも、倭寇の主体を高麗人とみる主張は下火になってきており、「本朝人（日本人）高麗に來りて、強盜・放火を致し、人民を虜掠する」などの記録を倭寇の所業の具体的な表現<sup>32)</sup>としている。ただそれでも、倭寇は高麗人を含む他民族で構成された、掠奪者のイメージよりは国家・権力を超越した国際色豊かな境界人としての側面が強調されている。

高麗を襲った倭寇の主体をめぐっては日韓の研究者の間で大きな隔たりがあるが、それに対



する私の立場は、どちらかと言うと韓国側の見解に近く少弐氏並びに松浦党に代表される九州地方の専門武士団、少なくともそれに等しい地域権力をバックに行動していたと考えている（しかし、その実体については韓国側の見解と大きく異なる）。既存の研究により詳細に検討された倭寇の高麗侵攻経路・行動範囲や戦闘能力を勘案しても、少弐氏や松浦党レベルの日本の公的権力による保護を得ていなければ、どれも説明することが困難と考えられるからである。

まず倭寇は、史料4のように庚寅年（1350）から対馬・九州近隣の固城・竹林・巨濟（慶尚南道地域）をかわきりに、侵攻回数の差はあるが慶尚道や全羅道の南海岸のみならず朝鮮半島のほぼ全域に侵攻している。また、李領氏は倭寇記事を丹念に検討され行動経路を類型化しているが、倭寇は1か所にとどまったのではなく転々と移動を伴っていたとみられる<sup>33)</sup>。前章では中国海域に侵攻した倭寇に言及したが、次の史料など<sup>34)</sup>によると、

#### 史料5

倭船一百三十艘，寇紫燕・三木二島，焚廬舍殆盡。（『高麗史』卷37 忠定王3年（1351）秋8月丙戌条）

倭焚喬桐・甲山倉，前代言崔源與戰，獲賊船二艘。（『高麗史』卷38 恭愍王元年（1352）3月庚申条）

倭焚喬桐，京城戒嚴，（『高麗史』卷39 恭愍王6年（1357）5月戊子条）

倭寇は庚寅年翌年の1351年から連続的に、海路では中国への通過地点であるが対馬など九州から相当離れた京畿道地域を侵寇していることがわかる<sup>35)</sup>。その規模も130艘近くの倭船が出没したようであるが、下線部によると倭寇により高麗の首都（開京）は戒厳体制に入ったという。このことは、倭寇が高麗の国家体制を相当動揺させたことを示唆しており、単発的な盗賊にとどまらない専門的な武装集団による侵寇であったことを想起させる。倭寇記事からは倭寇が時には百・三百・五百艘もの大船団を率いていることが確認されるが、次の史料は彼らの軍事・組織力を物語っている。

#### 史料6

①八月，遣海道元帥羅世・沈德符・崔茂宣，以戰艦百艘，追捕倭賊。（『高麗史』卷134 列傳第47 禡王6年8月条・『高麗史節要』卷31 禡王6年8月条）

②倭賊五百艘，入鎮浦口，以巨絙相維，分兵守之，遂登岸散入州郡，恣行焚掠，屍蔽山野，轉穀于其舶，米棄地厚尺，羅世・沈德符・崔茂宣等，至鎮浦，始用茂宣所製火砲，焚其船，煙焰漲天，賊燒死殆盡，赴海死者亦衆，賊盡殺所俘子女山積，所過波血，唯三百三十餘人，自拔而來，賊脫死者，趣沃州，與登岸賊合，焚利山永同縣。（『高麗史節要』卷31 禡王6年8月条）

③倭賊五百艘，入鎮浦口，以巨絙相維，分兵守之，遂登岸，散入州郡焚掠。羅世・沈德符等，至鎮浦，用火炮，焚其船，賊守船者，燒溺殆盡。賊窮怒益盛，盡殺所俘子女山積，所過波血。唯三百三十餘人自拔而來，守船賊脫死者，趣沃州，與登岸賊合，焚利山・永同縣，…（『高麗史』卷126 条列伝第39 邊安烈伝）

これらは、1380年に鎮浦口（忠清南道舒川郡長項邑一帯とみられる<sup>36)</sup>）に入寇していた倭賊五百艘（庚申年倭寇）を、高麗政府の遣わした海道元帥羅世・沈德符・崔茂宣らが率いる水軍（戦艦百艘）が撃退し、高麗軍が大勝したという記録である。この史料の信憑性は、李領氏が当代の学者兼政治家であった牧隱李穡の残した詩（『牧隱集』）に現れた倭寇記録と丹念に突き合わせることで立証され、この時に倭寇と高麗軍の間で歴史的な最大規模の戦闘があったといえる<sup>37)</sup>。詳細は省略するが鎮浦口で敗北を喫した倭寇は、そこから離合集散を繰り返しながら内陸地域に侵寇し、沃州・尚州などを転々としつつ、最後は引月駅の荒山で李成桂軍と激突し頭目（賊將）の阿只拔都が射殺されることで壊滅したのであった（残党の多くは無等山などで高麗軍に殺され、残りも小舟で海に逃げたようである）。

ともあれここで留意したいことは、倭寇が500艘の大船団を率いていたことはもとより<sup>38)</sup>、高麗の正規軍とほぼ互角に交戦するだけの戦闘能力を兼備していた点である。高麗軍はこの時、前述の明から賜った火薬を使用することでようやく倭寇を撃退できたのであった。また勝利後も、『牧隱集』には内陸部に行く倭寇たちに立ち向かった高麗軍の恐怖と歓喜の様子が詳述されており、倭寇が高麗の正規軍に匹敵する統制力（分散していた集団は、沃州からはまとまって一つの群れをなした）を有した武装集団であったことが窺い知られる<sup>39)</sup>。これは倭寇自体が強力な権力体であることを物語っており、やはりそれは九州地方の専門武士集団にもとめるほかないと考えられる。一般的に言われるようにこの倭寇との戦いの勝利が李成桂台頭の契機、ひいては朝鮮王朝を成立させる原動力となったとすれば、なおさらではないか。李成桂に等しい権力集団であったというのが、鎮浦口に集結した倭寇の実像であろう。このような性格は、史料6は最大規模の例であるが、程度の差はあれ庚寅年（1350）以降の倭寇にほぼ共通するとみられる。

とすれば高麗政府にとって倭寇は、単なる兵糧米などの掠奪集団という認識にとどまらなかったであろう。前述の通り明帝国の倭寇政策が方国珍など有力海上勢力の残党と倭寇の結託を防ぐことにあったとすれば、1380年に高麗政府が鎮浦口で大戦闘を挑んだのも、似たようなものであったと推察される。すなわち、高麗社会にも専門武士団（地域権力）の倭寇を見込んで接触した勢力が存在し、政府は海民や農民などの階層より公権力と関わる地方官や有力海上勢力たちが倭寇と結びつくことを危惧していたとも考えられる。倭寇側にとっても、高麗国内で諸目的を達成するためには、高麗側の権力との接触は不可欠であった。倭寇は遥か遠方の開京と西南海岸地域の間を往来する漕船の動きや倉庫の位置までも的確な情報を得ていた

が<sup>40)</sup>、これらはその賜物であったのではなかろうか。倭寇のような大規模集団ではないが、同じく東アジア海域を股にかけて人間の略奪行為（奴隷貿易）を推進した9世紀の海賊を例に挙げると、彼らは中国の節度使（山東半島の平盧軍節度使など）のバックアップのもとで新羅に渡り、その公的権力を活かして新羅の海賊などとも結びつき円滑な活動を実践したのであった（新羅人を拉致したのは現地の新羅人であった可能性が高い）。

私は倭寇＝高麗人・済州島人主体説はもとより連合説にも反対の立場であるが、これまで論じたことを勘案すれば、倭寇と高麗の諸勢力が自身の利害にもとづき結びつくことはあったのではないかと考えている。そこで注目されるのが、次の投化倭の動向である。

#### 史料7

巨済・南海縣投化倭，叛歸其國。（『高麗史』卷41 恭愍王18年（1369）7月辛丑条）

倭掠寧州・温水・禮山・沔州漕船，初倭人願居巨済，永結和親，國家信而許之，至是入寇。（『高麗史』卷41 恭愍王18年（1369）11月戊午条）

1369年に巨済島や南海県の投化倭（この時には倭寇）が高麗政府に反旗を翻して忠清道の寧州・温水などを襲撃したとあることから<sup>41)</sup>、その頃には倭寇が頻繁に襲った巨済島などに投化倭が存在したといえる。これらは国王の徳を募って高麗に帰化した倭人であるが、投化倭は特に朝鮮王朝初期に倭寇対策の一環として倭人を懐柔するなかで数多く登場している<sup>42)</sup>。上の事例は、倭寇の活発化した14世紀後半に高麗領内に高麗政府が認めた倭人が在住していたことになり、すでに庚寅年（1350）より高麗の公権力と倭寇が時として利害関係を一致させていたことを物語る。これは、倭寇が少しでも公的権力と結びつこうと高麗の地方官や支配勢力に擦り寄っていたのと、高麗側でも倭人（倭寇）との結合を切望していた様子が垣間見られる。高麗側も、倭寇の権力を活用しようと考えていたのであろう。これに関連して次の史料も両者の関係を窺わせる。

#### 史料8

辛禡初，倭藤經光率其徒來，聲言將入寇恐愒之因索糧。朝議，分處順天・燕岐等處，官給資糧，尋遣密直副使金世祐，諭先致誘殺。先致大具酒食，欲因餉殺之，謀洩，經光率其衆，浮海而去，僅捕殺三人。先致懼罪，詐報斬七十餘人，事覺編配戍卒。前此倭寇州郡，不殺人畜，自是每入寇，婦女嬰孩屠殺無遺，全羅・楊廣濱海州郡蕭然一空。（『高麗史』卷114 金先致伝）

辛禡元年（1375）に倭の藤經光が徒を率いて入寇しようとしたので、高麗政府は密直副使金世祐を遣わして、かつて全羅道都巡問使柳濯の下で倭寇撃退を担った全羅道元帥（武官）の金



先致に、藤経光に食事をふるまって毒殺せよと命じたという<sup>43)</sup>。この行動は失敗に終わり倭寇のメンバーを激怒させてしまったようであるが、ともかくここで確認しておきたいことは、全羅道などの官人の中には倭寇の頭目を食事に誘いだすことのできる人物がいたことである。倭寇もそうした依頼には応えていたといえ、倭寇がそうした地域権力に接近しようとした政治性も窺い知られる。

これに付随して次の史料をみると、

#### 史料9

倭入昇天府興天寺，取忠宣王及韓國公主眞而去。（『高麗史』卷39 恭愍王6年（1357）9月戊戌条）

倭入昌陵，取世祖眞以歸。（『高麗史』卷41 恭愍王14年（1365）3月己巳条）

倭寇が昇天府の興天寺に入って忠宣王と韓国公主の肖像画を持ち去ったり、昌陵（高麗を建国した太祖の父墓）に入り太祖の肖像画を奪ったりしたことがわかる。このことも、村井章介氏の説く政治性（中央政府に批判的な高麗人の行動<sup>44)</sup>）とは無関係と思われるが、倭寇が公的なものへの関心をあらわにしていたとみることにはできる。

ところで倭寇と高麗側の公的権力の接点は、1359年に高麗の王京に漂着した倭船が倭寇と誤解され攻撃を受けた（この年には礼成江に倭寇が出没していたためか）記録<sup>45)</sup>からも、倭船と倭寇は入り混じって活動していたようであり（倭船が時として略奪行為におよび倭寇に転ずることもあったであろう）、さほど難しくなかったと考えられる。以上を勘案すると、高麗（後の朝鮮）政府も倭寇に対して、兵糧米などの戦時物資の掠奪以上に国内の諸勢力が彼らと結びつき、東アジア海域を結ぶ公的なネットワークに参入することに神経を尖らせていたと推察される。

### 3. 元末明初・舟山群島の海上勢力と高麗・倭寇 — 鎮浦口に集結した倭寇と関連して —

倭寇の活動・性格は、高麗を超えて江浙地方（特に舟山群島）などの東アジア海域の公的権力に連なる海上勢力（方国珍など）の動向とも密接な関連があった。また何より、舟山群島海域と高麗海域の動向は直接連動していたと考えられる。特に、朱元璋が方国珍を倒して江浙地方を平定したわずか2カ月後の1368年2月に起きた蘭秀山の乱は、高麗と舟山群島の関係を具に知らせてくれる<sup>46)</sup>。史料1の明の海禁政策の中にも蘭秀山が登場するが、蘭秀山は蘭山と秀山を合わせた名称であって、史料には舟山群島及びその周辺の海上勢力を含めて「蘭秀山賊」と記されている。舟山群島の地方志（『光緒・定海県志』26 大事志）によると、蘭秀山の

民（昌国の海寇）の多くはかつて方国珍に属しており、明の影響力が拡大（福建方面も攻略）されるとそれに反発し明州府城を攻撃したが、結局鎮圧されたという。そして、ここで蜂起し敗れた海上勢力の多くは、高麗海域・韓国西南地域に逃亡したのであった。この時の模様は、朝鮮で編纂された明の公文書集『吏文』「蘭秀山叛賊干連人高伯一發回咨」<sup>47)</sup>を通して克明に窺い知ることができる。

この文書については藤田明良氏に専論があり詳細はそれにゆずるが<sup>48)</sup>、本稿との関係でいえば、「蘭秀山叛賊」関係者として昌国県富七保（舟山本島の一つ）から高麗に逃避した林宝一<sup>49)</sup>と彼らをかくまった高麗人高伯一の残された供述にもとづき、舟山群島と高麗の交流を具体的にみてみたい。次の史料（①は林宝一・②は高伯一の供述）から蘭秀山の乱敗北後の林宝一の動向を簡単に示せば、

#### 史料 10

- ①夏山躲避後、於六月初八日開洋、至十二日日到耽羅。寶一収買海菜、自趣本處洪萬戸船、致高麗遇見陳魁五等。將布五匹雇倩、肩駝綿布到於古阜、就留伊家使喚。洪武三年五月二十四日、有朝廷差丁百戸等、官到来。先將陳魁五捉獲、各賊家小俱各逃避。陳魁八與寶一前去蒸山、藏避於隣人高伯一家做飯喫食。將蘇木等物與訖本人。至二十八日、寶一思付得、陳魁八必是逃走又見本賊身畔、藏帶金銀等物。食圖取要、窺伺陳魁八睡着、用大石塊於本人胸堂上、打訖二下身死。將伊身畔金銀物件、盡行収要入己。是實。
- ②係高麗人氏。見於全羅道住坐。洪武二年五月二十八日、有陳魁八・林寶一、到家將鍋做飯、與訖蘇木・白礬并衣帶八條。後、見林寶一不見陳魁八。問得林寶一説稱陳魁八往鎮浦去了後又與訖玉色紗裙一條・白苧布衣二件。除外別不知謀逆事情。是實。

彼は夏山（現在地未詳）に身を潜め外洋に出たが、初めは耽羅（済州島）に逃げて海菜（ワカメ）を買い集め、洪万戸船で高麗本土に向かった。高麗では蘭秀山賊の陳魁五に再会し布5匹で雇われ、綿布を担って古阜（全羅北道扶安）に到着すると、そのまま陳氏の家の召使いとなった。だが2年後の洪武3年（1370）5月に、明が丁百戸を高麗に遣わして蘭秀山賊関係者の逮捕を要求し捜査がおよぶと<sup>50)</sup>、最初に陳魁五が捕らえられ、混乱の中で陳魁八と林宝山は全羅道の高麗人高伯一の家に逃げ、かくまってもらった代償に蘇木（東南アジア産の漢方薬に用いる生薬）を与えたとある。なお、高麗人の高伯一が連座して逮捕されたのも、このためであった。

ここでまず注目したいのは、蘭秀山賊（舟山群島）の人々が高麗海域に出入りしていただけてでなく、全羅道など西南地域に移住し定住していたことである。林宝一が高麗で頼った陳魁五は、林宝一の供述（注49下線部）で蘭秀山賊のリーダー格に挙げられている秀山陳元帥、より具体的には次の『高麗史』にみられる陳君祥・陳魁一（注50も参照）の一族であった。

## 史料 11

帝遣禮部主事柏禮，來頒封諸子詔，侍儀舍人卜謙頒科舉詔。又遣百戶丁志・孫玉來，執蘭秀山叛賊陳君祥・陳魁一等，以歸。先是，君祥等，居江南詐降于明殺其官吏，率徒百餘人，航海而來居于古阜。（『高麗史節要』卷 29 恭愍王 19 年（1370）6 月条）

そして 1370 年に古阜（扶安）で逮捕され明に送還されたのが 100 余人とあることから、江南（蘭秀山）から大規模な集団が高麗海域に逃避していたことがわかる。しかも彼らは、2 年間は普通に交易などに従事して暮らし、史料 10 - ②下線部によれば日常的に鎮浦（忠南舒川）を往来しており、韓国の西南海岸地域を股にかけ活動していたと考えられる。さらに陳魁五逮捕後にも、陳魁八と林宝一は高伯一という高麗人宅に世話になっている。これは、上の史料 10 からも彼らが蘇木や白礬・衣帯などの交易品の数々と金銀を持参した交易者の側面をのぞかせるが、それ以上に以前から両者の間で海を越えてネットワークが形成されていたためとみられる。

これらをいかに考えるかであるが、中国の乱の首謀者で比較的大きな集団を形成していた陳氏一族や林宝一が 2 年もの間（明からの逮捕要請がなければこれ以後も安住していた可能性が高い）、上のように西南地域で自由に活動できたのには、高麗側の地方官をはじめとする地域権力と良好な関係で結ばれていたからではないのか。次の史料によると、

## 史料 12

政堂文學韓仲禮買蘭秀山賊船。帝聞之曰，宰相不當買賊船。宜速推還。船已壞。（『高麗史』卷 43 恭愍王 21 年（1372）5 月条）

1372 年に高麗政府高官が蘭秀山賊から船<sup>51)</sup>を購入していたことが発覚し、高麗は光武帝から叱責されながら船の返還を命じられている。これは、高麗の中央政府の官僚が、中国からの貿易船や地方官を介して陳君祥のような蘭秀山の海上勢力と接触したことを想起させる。反対に蘭秀山の海上勢力が高麗政府の官僚に船の購入を働きかけた可能性もあり得る。ともあれ、高麗の公的権力と蘭秀山賊の結びつきを物語っている。

また、高麗の地方官（公権力）が蘭秀山の海上勢力を把握していたため、彼らは高麗海域及び西南地域を徘徊することができたともみられる。9 世紀の例ではあるが、新羅から唐に移住した在唐新羅人や本国の新羅人たちが唐国内で広範な海上活動に従事できたのも、節度使など公権力のもとで保護を受けていたからであった。詳細は省略するが張保臯も平盧軍節度使のもとで海上活動に従事することにより、頭角をあらわし海上王とよばれるまでに成長したのであった<sup>52)</sup>。

さらに言えば、高麗人の高伯一が陳氏一族など蘭秀山の海上勢力に接触したのも、中国の江

南海域で海上活動に従事するために、その地域の公的権力に少しでも接近することにあつたと推察される。注 49 の林宝一の供述のなかで蘭秀山賊の主犯格を「陳元帥」「王元帥」とするが、これは方国珍が「偽官・悍将二百余人」を任じたこととの関係が指摘されている<sup>53)</sup>。蘭秀山賊は、方国珍時代にばらまかれたものであるが元帥という公的権力に連なる称号を利用していたのであつた。また、『明太祖実録』に「方国珍が海島に逃れた当初、元朝から授かった行枢密院の印章を紛失した。蘭秀山の民がこれを手に入れ、利用して衆を集め強盗を働いた」<sup>54)</sup>という記録があり、彼らは公的な印章を用いて勢力を拡大していた様子が推察される。9世紀の例ではあるが、836年に新羅執事省が日本の太政官に送った外交文書である牒（『続日本後紀』承和3年（836）12月丁酉条に転載）には、新羅政府が東アジア海域の島嶼之人を擲掇して「島嶼之人、東西窺利、偷学官印、仮造公牒、用備斥候之難、自逞白水之遊」としており、海上勢力（張保臯の可能性もあり得る）が東西（東アジア海域）で利（交易）を求めて官印を真似し公牒を偽造していたことが確かめられる<sup>55)</sup>。9世紀の新羅では、海上勢力は偽の官印・公牒といえども公的な媒体を利用することで<sup>56)</sup>海上活動を有利に進めようとしていたのである。

それならば蘭秀山の海上勢力は、乱を起こす以前から方国珍などの地方政権に連なる公的な称号や印章を利用しつつ、時には高麗海域にまで出沒したと考えられる（乱以後もそれらを利用することで結束したのであろう）。さらに、蘭秀山のみならず同じく江浙地方の明州の海商（海賈）たちは、高麗入港の際には史料 10 - ②の陳氏一族との関係で挙げた鎮浦を恒常的に利用していたとみられる。当時の高麗政府の著名な文臣李穡が中国留学時の同窓であつた明州出身の友人を偲んで詠んだ詩に「鏡湖鎮浦非他水、月艇風檣似近郷、丐我苧根煩海賈、送君綿實托郷人（〈詠木綿布〉『籌海図編』）」とあるように、当時の高麗官僚は鏡湖（明州西の紹興の湖）と鎮浦が水路でつながり船によって結ばれていたと認識していたことを読み取れる。また、同じく高麗の文臣尹珍が西南地域の羅州の海辺を詠んだ詩には「有時賈客通吳越」<sup>57)</sup>とあり、中央官僚と関係を持つ海商たちが中国江南に渡航した例がみられる。それらもその後中国海域で活動するために、蘭秀山などの海上勢力に接近した可能性は十分あり得よう。逮捕された全羅道の高伯一も、こうした人物のひとりであつたとみてよいだろう。

ともあれ、14世紀中葉（倭寇が活発化した時期）の高麗の西南地域は、中国舟山群島の海上勢力（特に蘭秀山賊）が頻繁に往来しコミュニティーを形成するまでにいたつた。蘭秀山の人々は、逮捕されていることから互いの利害にも左右されていたが、以前からの高麗の地方官や中央官僚などとの関係をバックに高麗海域で活動したと考えられる。なお、明帝国の命令で蘭秀山賊を逮捕して以後も蘭秀山の逋逃が耽羅に集まつたとあり、洪武5年（1372）に今度は高麗政府が彼らの討伐を明に要請していることからみて<sup>58)</sup>、高麗海域での活動は続いていたようである。

ここで改めて喚起されるのが、蘭秀山賊と倭寇の関係である。前述のように史料 2 や次の①を通して、

## 史料 13

- ①国初，定海之外，秀・岱・蘭・劍・金塘五山，争利，内相仇殺，外連倭夷，歲為邊患。  
 (『籌海図編』卷5 浙江事宜)
- ②海寇張阿馬引倭夷入寇。官軍擊斬之。張阿馬台州黃巖縣無頼民，常潛入倭国，導其群  
 党，至海辺剽掠。辺海之甚之。(『明太祖実録』洪武24年(1391)8月癸酉条)

舟山群島の海上勢力(諸賊強豪)が倭夷(倭寇)を引き込んでいたことが確かめられた。さらに上の②にみられる海寇張阿馬の行動を通して、彼らは日本にも入寇しそこで潜伏しながら倭寇と交流、ひいては彼らと結託していたことがわかる。すなわち、舟山群島の海上勢力(特に蘭秀山賊)は、高麗海域や日本列島の海上勢力、さらにはそのバックにある地域権力と互いの利害関係が一致するところでは結びついていたのであった。

このように考えると、1380年に鎮浦口に集結した最大規模の倭寇と舟山群島の海上勢力の関係が注目されてくる。まず鎮浦(忠南舒川)は、前述のように1370年前後には倭寇とも結託した陳氏一族をはじめとする蘭秀山賊が集住していた。そして時同じくして上の史料8によれば、辛禰初(1375)頃より倭寇の行為が残虐化し全羅・楊広の浜海の州郡が蕭然一空になったという。これを裏付ける事実として、数年前の1369年に高麗王が明の洪武帝に倭寇の擾乱によって高麗の民が海浜に暮らせなくなったと申し出ており<sup>59)</sup>、『新增東国輿地勝覽』卷19 忠清道泰安県でも鎮浦口から程近い泰安の行政府を倭寇の攻撃から守るために内陸側に移したとしている。これは空島化政策と呼ばれているが<sup>60)</sup>、そうしたことは舟山群島から来た人々も集住する場所に倭寇が頻繁に訪れていた様相を示している。とすれば、倭賊五百艘(庚申年倭寇)が九州地方から遥かに離れた鎮浦口に集結できたり、敗戦以後も李成桂に敗れて解散に陥るまで高麗の内陸部を徘徊できた背景にも<sup>61)</sup>、高麗並びに倭寇とも繋がりを持つ舟山群島の海上勢力の存在を抜きには考えられない。そして何より留意したいのは、舟山群島と高麗の海上勢力・倭寇の背後には公的権力が存在し、各々それを利用、さらに相手方のそれに接近することで海上活動に有利な保護を得ていた点である。

最後に、庚申年倭寇の五百艘をはじめ倭寇の主体を高麗人と考えた日本側の研究者が史料的根拠に挙げた李順蒙上言に簡単に触れておきたい。

## 史料 14

臣聞。前朝之季，倭寇興行，民不聊生。然其間倭人不過一二。而本国民仮著倭服，成党作乱。是亦鑑也。(『朝鮮世宗実録』世宗28年(1446)10月壬戌条)

最初に唱えた田中健夫氏は、規模・回数に加え上の下線部をそのまま受け入れて、倭寇の主体を日本人(倭人)ではなく高麗人と考えた<sup>62)</sup>。だがこの記録は、精巧な批判がある通り李



順蒙が自己の主張を正当化するために出してきた議論であって、高麗末期の倭寇の実情をそのまま述べたものではない<sup>63)</sup>。そこには、実際の出来事を自身の都合に合うように誇張・歪曲するのが常である。とはいえ、政府への提案の中で全く実在しなかった例を挙げるわけではなく、下線部の状況の何らかの伏線が当時の高麗に存在したことは間違いない。これをいかに考えるかであるが、高麗西南地域に移住・定住した舟山群島の人々と倭寇のつながりを勘案すれば、それらが倭服を着て党を組む（倭寇を名乗る）ことなどは十分想定できる。さらに憶測を重ねれば、『高麗史』には数点であるが倭寇に賤民の水尺・禾尺・才人が参加した例<sup>64)</sup>がみられるが、『高麗史』巻39 恭愍王5年（1356）9月庚辰条には「遣使于楊広・全羅道，刷濟州人及禾尺才人，充西北面戍卒」とあり、中央政府は西南地域の禾尺・才人を警戒していたことがわかる。禾尺・才人（非農業民）には、舟山群島などから渡来した人々が含まれていた可能性は高いと考えられるのである。

#### 4. 9世紀末の新羅海賊との比較史的考察

倭寇は14世紀中葉～15世紀の朝鮮半島や中国を襲ったのであるが、それから遥か400年以上遡るが9世紀後半～末には、朝鮮半島側の新羅海賊が日本列島の対馬島・松浦郡・飽田郡など九州地方を襲っている。なかでも倭寇が隆盛した頃と同じような東アジア情勢下にあった、日本年号で言うと寛平年間（889～898）には、倭寇を彷彿とさせる大規模の新羅海賊事件が数多く報告されている。新羅海賊の出港地であった朝鮮半島では、14世紀中葉の日本の南北朝動乱期と似たような様相を呈しており、新羅・後百濟・後高句麗が鼎立し戦闘を繰り返す後三国時代であった。ここでは、寛平6年（894）9月に対馬を襲った事件を中心に9世紀末にみられる新羅海賊の日本襲撃をいくつか取り上げることで、倭寇との比較史的な考察をすすめてみたい。

次の史料が、894年9月の新羅海賊による対馬襲撃の模様を伝える記録である。

##### 史料15

九月五日對馬島司言新羅賊徒船四十五艘到着之由(1)，大宰府同九日進上飛驒使。同十七日記曰，同日卯時，守文室善友召集郡司・士卒等，仰云(2)，汝等若箭立背者，以軍法將科罪。立願者，可被賞之由言上者。仰訖，即率列郡司・士卒，以前守田村高良令反問，即島分寺上座僧面均・上縣郡副大領下今主為押領使，百人軍各結廿番，遣絶賊移要害道。豐圓春竹卒弱軍四十人，度賊前。凶城見之，各銳兵而來向守善友前，善友立楯令調弩，亦令亂聲。時凶賊隨亦亂聲，即射戰，其箭如雨。見賊等被射并逃歸，將軍追射，賊人迷惑，或入海中，或登山上。合計射殺三百二人，就中大將軍三人・副將軍十一人(3)。所取雜物，大將軍縫物，甲冑・貫革袴・銀作太刀・纏弓革・胡籙・宛夾・保呂各一具，已上附脚力多米常

繼進上。又奪取船十一艘・太刀五十柄・杵千基・弓百十張・胡籙百十房・楯三百十二枚。僅生獲賊一人，其名賢春，即申云，彼國年穀不登，人民飢苦，倉庫悉空，王城不安。然王仰為取穀絹，飛帆參來(4)。但所在大小船百艘，乘人二千五百人。被射殺賊其數甚多(5)。但遺賊中，有最敏將軍三人，就中有大唐一人(6)。已上日記。（『扶桑略記』第22 寛平6年(894)9月5日条)

これは、日本側が新羅海賊を打ち破ったことを中央政府に届けた際の内容<sup>65)</sup>であるが、両者の戦闘模様に加え新羅海賊の来襲目的や構成要員までが記されており、新羅海賊の主体勢力を論じるには格好である。倭寇とも比較検討するために、山内晋次氏をはじめとする先学の研究成果にもとづき<sup>66)</sup>、新羅海賊の視点からその要点を整理すれば以下のようである。

まず、新羅人捕虜が述べた(5)から新羅海賊の集団規模が窺い知られるが、新羅の本拠地のものを含めると大小の船が100艘あり、乗員は2500人いるという。実際に対馬を襲撃したのは(1)に記す45艘（その中の302人が日本軍との戦闘で射殺）であったともみられるが、それにしてもこれは単なる海賊（海商・海民・農民）というよりは倭寇に通ずる専門的な武装集団であったことを想起させる。さらに、(3)によると新羅海賊には大將軍・副將軍といった体系的な軍事組織が存在し、その直後をみると中央政府軍が持つような専門的な武器・武具を大量に装備していたことがわかる。これに関連して(2)以下には、1か月近くにもわたり新羅海賊と戦った日本の政府軍の活躍と戦況・戦果（中央に報告する側からいえば最も強調したい箇所）を記している。中央政府は大宰府の報告に基づき郡司・士卒等に命じて正規軍を編成したが、その陣頭指揮をとった対馬守文室善友は、883年の俘囚の反乱を戦勝に導いた当代を代表する軍事官僚であった。まさに、敗北したものの日本の有能な正規軍と一定期間対等に戦闘を繰り広げた新羅海賊は、鎮浦口に集結し高麗の正規軍や内陸部で李成桂と戦闘を経験した庚申年倭寇を想起させる。ここからも、新羅海賊は武装商人や海民の盗賊集団とは程遠い存在であり、公的権力に連なる集団であったと考えられる。

そこで改めて、(4)にみられる新羅人捕虜の賢春が告白した新羅海賊の対馬島襲撃の理由・目的に注目してみる。彼は、「不作と飢饉が発生し税が中央の倉庫に入ってこなくなり、それを補うために新羅王が穀物や絹を掠奪するよう命じたため」と供述している<sup>67)</sup>。もちろんこれは、捕虜賢春が命乞いのために発した虚言であった可能性も十分あり得るが、そうであったとしても新羅海賊が新羅王の命令を利用（少なくとも意識は）していることは確かである。すなわち新羅海賊は、その実体は問題であるが公権力と不可分な存在であったことを物語っている。山内氏も指摘しているように、新羅海賊が新羅王権の直属下にあったとは考えられないが、当時の新羅の地方社会では城主・將軍を自称する地方勢力（豪族）が台頭してきており、そうした豪族たちが新羅王権の命令をゆがめたかたちで利用したものと推察される<sup>68)</sup>。豪族といっても広い意味の地域権力であったために、(4)の供述は新羅海賊の公的な性格を端的に示

していると考えられる。さらに言えば、894年頃の朝鮮半島では後三国の戦乱が展開しており特に西南地域は後百済が支配していたので、その領域から遣って来たとすればその権力体は後百済ということになる<sup>69)</sup>。ともあれこの史料を通して、新羅海賊の背後には新羅王でなくとも新羅または後百済の豪族などの公的権力が存在し、それらが後三国の抗争の中で不足した税・物資や抗争に必要な軍事物資の調達のために対馬島の襲撃を命じていたことが窺い知られた。

これは倭寇の背後に九州地方の有力武士団（地域権力）がいたことと極めて似ている。新羅海賊と新羅国内の公的権力の結びつきは、張保臯暗殺後（9世紀中葉以後）の、規模を拡大させ日本列島を頻繁に襲った新羅海賊<sup>70)</sup>にみられる比較的早くからの特徴であったようである。次の史料は869年の新羅海賊事件に関わる一連の記録である。

#### 史料 16

- ①大宰府言、去月廿二日夜、新羅海賊乗艦二艘来博多津、掠奪豊前国年貢絹綿、即時逃竄。発兵追逐□不獲賊。（『日本三代実録』貞観11年（869）6月15日辛丑条）
- ②遣新羅人廿人配置諸国、清倍・鳥昌・南卷・安長・全連五人於武藏国、僧香嵩・沙弥伝僧・関解・元昌・卷才五人於上総国、潤清・果才・甘参・長馬・才長・真平・長清・大存・倍陳・連哀十人於陸奥国。〈中略〉僧沙弥等安置有供定額寺、令其供給。〈中略〉潤清・長馬・真平等、才長於造瓦。預陸奥国修理府造瓦事。令長其道者、相從伝習。（『日本三代実録』貞観12年（870）9月15日甲子条）

上の史料から新羅海賊（交易活動者）の構成者の性格を論及した田中史生氏は、①の新羅海賊事件の処分に関連した②を通して、事件に関与した者の中に新羅人の僧侶や造瓦の技術者が含まれていることを明らかにした<sup>71)</sup>。これは、新羅海賊の背後に寺院が存在したことを物語る。また同年の貞観12年（870）11月13日辛酉条には、大宰少弐の藤原元利万侶が新羅国王と密通していた事実が発覚したことが記されている。これは新羅海賊事件の翌年に起きた事件であるため、両者の関連が想起されるばかりか、それらの背後に新羅王がいたことを示唆している。加えて、新羅海賊を編成した寺院については以前に検討したことがあるが、張保臯が暗殺された9世紀中葉以後の西南海岸地域に、王京人（真骨貴族）が財貨を寄進して建立された聖住寺（忠南保寧）や宝林寺（全南長興）などの南宗禅寺院がそうであった<sup>72)</sup>。すなわち新羅海賊は、王京人・新羅王という公的な政治的権力体の構成員と不可分の関係にあったのである。

さらに、上では新羅海賊（背後に新羅国王）と大宰府官人（大宰少弐）のつながりを指摘したが、新羅海賊は九州地方の諸官人とも頻繁に接触していたようである。

## 史料 17

- ①大宰府馳驛奏言、肥前國基肆郡人川邊豊穂告、同郡擬大領山春永語豊穂云、与新羅人玠賓長、共渡入新羅國、教造兵器器械之術、還來將擊取對馬島。藤津郡領葛津貞津・高來郡擬大領大刀主・彼杵郡人永岡藤津等、是同謀者也。仍副射手册五人名簿進之。〔『日本三代実録』卷 13 貞觀 8 年（866）7 月 15 日条〕
- ②參議大宰權帥從三位在原朝臣行平起請二事。其一事。〈中略〉其二事。請合肥前國松浦郡庇羅值嘉兩更建二郡号上近下近置值嘉嶋曰、〈中略〉加之地居海中境隣異俗、大唐新羅人來者、本朝入唐使等、莫不經歷此嶋(1)。府頭人民申云、去貞觀十一年、新羅人掠奪貢船絹綿等日、其賊同經件嶋來(2)。〔『日本三代実録』卷 28 貞觀 18 年（876）3 月 9 日条〕
- ③先是、大宰府言、對馬島下縣郡人卜部乙屎麻呂、爲捕鷓鴣鳥、向新羅境。乙屎磨爲新羅國所執縛、囚禁土獄。乙屎磨見彼國挽運材木、構作大船、擊鼓吹角、簡土習兵。乙屎磨竊問防援人、答曰、爲伐取對馬嶋也。乙屎磨脱禁出獄、纔得逃歸。〔『日本三代実録』卷 17 貞觀 12 年（870）2 月 12 日条〕

①には、新羅人と結んで對馬島を侵攻しようとした反乱計画への加担者が基肆郡・藤津郡・高來郡・彼杵郡（藤津以下は天草灘・五島灘に面する地域）を根拠地とする郡擬大領層であったとしている。五島列島は、中国の舟山群島を結ぶ遣唐使の中継地点で有名であるが、②-①から新羅船も頻繁に来航したことがわかる。早くに戸田芳実氏は、貞觀 11 年（869）に博多津で豊前国官物絹綿の貢納船を襲った新羅人がこの島を経由したという②-(2)及び史料 16-①を史料的根拠に、五島列島には新羅船が停泊して博多津の情報を入手できるような基地が存在し、それと連携する西海の海人集団が活動していたと推測した<sup>73)</sup>。新羅海賊は日本の貢納船についての航路や到着日を正確に把握していたといえるが、上の史料を勘案すればこれらの情報は海民から仕入れたのではなく、郡司をはじめとする公的な地方官人と接触しながら入手したと考えられる。また③は、對馬島の住民は鷓鴣を捕獲するために新羅の領域深くまで入り込んでいたが、そこで獄舎の下級官吏（または兵士）が軍事情報の下線部（對馬島侵寇）を漏らすほどの信頼を得ていたことが窺い知られる。その他にも新羅海賊は對馬や五島列島を中心に活発な活動をみせているが<sup>74)</sup>、彼らが国外の日本で貢納品が集まる場所を効率的に襲撃できたのは、日本側に彼らに情報並びに保護を与える権力体が存在したからであったといえる。これは、倭寇が出港地の九州地方から遙か離れた京畿道海域にまで出沒し、開京への漕船を襲ったのにも通ずるのではないか。

最後に史料 15 に戻り、下線部(6)は倭寇の民族構成を検討する上でも注目される。これによると、日本側との戦闘において戦死・捕獲をまぬがれた新羅海賊のなかに、最敏な將軍が 3 人いて、そのなかの 1 人が唐人であったという。すなわち、新羅人と唐人が交じり合っただけで賊団を形成していたことがわかる。この点に最初に注目したのは山内氏であるが、9 世紀の羅唐間に

展開した交流と9世紀後半の唐国内の民衆反乱（裘甫の乱・龐勛の乱・黄巢の乱）の動向を詳細に分析し、唐から新羅（海中）に逃避するのは一つの戦略であり、9世紀後半の新羅では唐人と新羅人が連携する場合がありますと立証している<sup>75)</sup>。しかも將軍の一人というので元来も武将であったと推察される<sup>76)</sup>。こうしたことは、9世紀後半と似たような状況下にあった14世紀中葉・後半の東アジア海域で活発化した倭寇にも通じると考えられる。新羅海賊の例からみても、前述のように倭寇が蘭秀山賊など中国人や高麗人などと、連合とはいかないまでも結びつき活動していたことは認めてよいだろう。

## おわりに

以上のように、新羅海賊は日本の対馬・五島列島を襲い、倭寇はそこを出港地に高麗・中国海域に侵寇したのであるが、それらの地域間には少なくない交流があったばかりか、公的権力が複雑に絡み合っていた。そうした力が倭寇や新羅海賊の活動を一層活発化させたのであって、両者は地域社会・国家の権力から決して自由な存在ではなかった。倭寇は九州地方の有力武士団を、新羅海賊は韓国西南地域の有力豪族を母体にしていたが、東アジア海域で十分な活動を展開するためには、舟山群島などの中国や高麗・日本海域の公的権力につらなる勢力に擦り寄り保護を受けなければならなかった。逆にそれらも倭寇と接触することで様々な恩恵（利益）を得られたのである。両者は境界人として国際性・多様性を持っていた<sup>77)</sup>と思われるが、動乱の世の東アジア海域では、民衆間の対立にはじまり地域・国家間<sup>78)</sup>の国際的なトラブルに巻き込まれる側面に常時置かれていたことを改めて認識する必要があるだろう。国家の辺境では異文化を有する人々に対する排外的な意識（差別）も起こりやすく、倭寇集団の性格は、国家・権力間の犠牲ともいえる不安定で生々しい現実に目を向けることで一層明らかになるものと考えられる。

### ◎付記

本稿は、2012年11月5日～7日に韓国莞島で開かれた韓国海洋財団・全南大学校世界韓商文化研究団主催の国際学術会議『東アジアの海上活動とグローバル・ディアスポラ』で報告したものに、加筆・修正を加えたものである。

### 注

- 1) 李領「新羅・唐の国内情勢と9世紀初め海賊—(庚寅年(1350)倭寇)との比較史的考察を通して—」(『対外文物交流研究』10, 2011)。
- 2) 近藤浩一「東アジア海域と倭寇」(『東アジアの海上活動とグローバル・ディアスポラ』全南大学校世界韓商文化研究団, 2012)。
- 3) 田中健夫「倭寇と東アジア通交圏」(『日本の社会史1』岩波書店, 1987)。



- 4) 高橋公明「中世東アジア海域における海民と交流—济州島を中心として—」(『名古屋大学文学部研究論集』史学 33, 1987)。
- 5) 村井章介『中世倭人伝』(岩波新書, 1993)・村井章介「倭寇の多民族性をめぐって—国家と地域の視点から—」(『中世後期における東アジアの国際関係』山川出版社, 1997)・村井章介「東シナ海と倭人の世界」(『nippon.com コラム』, 2011)。
- 6) 浜中昇「高麗末期倭寇集団の民族構成」(『歴史学研究』685, 1996)。
- 7) 李領『倭寇と日麗関係史』(東京大学出版会, 1999)。
- 8) 関周一「倭寇に関する日韓の認識」(『歴博』129, 2005)・関周一「『中華』の再建と南北朝内乱」(『日本の対外関係 4』吉川弘文館, 2010)。
- 9) 佐伯弘次「14-15 世紀東アジアの海域世界と日韓関係」(『日韓歴史共同研究報告書・第 2 分科会(中近世史) 篇』日韓歴史共同研究委員会, 2010)。
- 10) 詳細は、金普漢「韓国内の倭寇研究の学術史的検討」(『日韓歴史共同研究報告書・第 2 分科会(中近世史) 篇』日韓歴史共同研究委員会, 2010) を参照。
- 11) 李領「〈庚寅年以降の倭寇〉と内乱期の日本社会」(『倭寇と日麗関係史』東京大学出版会, 1999 A)・李領「〈庚申年以降の倭寇〉と松浦党—禰王 3 年(1377)の倭寇を中心に—」(『村井章介編 8-17 世紀の東アジア地域における人・物・情報の交流: 海域と港市の形成, 民族・地域間の相互認識を中心に』科学研究費補助金研究成果報告書, 2004) など。
- 12) 上に挙げた研究以外にも、海津一朗「『元寇』, 倭寇, 日本国王」(『日本史講座 4』東京大学出版会, 2004)・森茂暁『南朝全史—大覚寺統から後南朝まで』(講談社, 2005) を参照。
- 13) 海津一朗前掲論文・桃木至朗編『海域アジア史研究入門』(岩波書店, 2008)・藤田明良「東アジア世界のなかの太平記」(『太平記を読む』吉川弘文館, 2008) など。
- 14) これ以前にも日本人による倭寇行為はあったが、これらは日本商人と現地役人の間のトラブルであったことが立証されている(榎本渉「元朝の倭船対策と日元貿易」『東アジア海域と日中交流—9~14 世紀』吉川弘文館, 2007)。
- 15) 『元史』巻 139 紐的該伝・『元史』巻 145 月魯不花伝。詳細は榎本渉「元末内乱期の日元交通」(『東アジア海域と日中交流—9~14 世紀』吉川弘文館, 2007) を参照。
- 16) 山崎岳「方国珍と張士誠—元末江浙地方における招撫と叛逆の諸相—」(『海域交流と政治権力の対応』汲古書院, 2011)・檀上寛「方国珍海上勢力と元末明初の江浙沿海地域社会」(『東アジア海洋域圏の史的研究』京都女子大学, 2003) など。
- 17) 『羽庭集』巻 5 送江浙行省檢校官章公彦復序。
- 18) 漕糧に関わる官府である海道運糧万戸府については、植松正「元代海運万戸府と海運世家」(『京都女子大学大学院文学研究科研究紀要・史学編』3, 2004) を参照。
- 19) 「方国珍及び張士誠の余衆は多く海島に潜んでおり、倭と混じって寇をなした」(『明史』兵志海防条) という記録もあり、配下の中には、山東半島の倭寇討伐を担っていた時期から倭寇と連携を模索した者もいたと推察される。
- 20) 近藤浩一「登州赤山法花院の創建と平盧軍節度使・押衙張詠—張保臯の海上ネットワーク再考—」(『京都産業大学論集』44, 2011)。このことは、最近の李領前掲論文 2011 で一層具体的に論じられている。
- 21) 檀上寛前掲論文。
- 22) 有井智徳「十四・五世紀の倭寇をめぐると中韓関係」(『高麗李朝史の研究』国書刊行会, 1985)。
- 23) 『高麗史』巻 41 恭愍王 16 年(1367) 5 月乙巳条。
- 24) 『明太祖実録』洪武 2 年(1369) 10 月壬戌朔条・『高麗史』巻 42 恭愍王 19 年(1370) 5 月甲寅条。
- 25) 『高麗史』巻 44 恭愍王 22 年(1373) 7 月壬子条。
- 26) 『高麗史』巻 44 恭愍王 22 年(1373) 11 月条。この史料によれば、高麗は倭船を拿捕するための軍船を造ったものの、器械・火薬・硫黄・焰硝などが不足し利用できなかったため明に請願したとする。
- 27) 『高麗史』巻 44 恭愍王 23 年(1374) 6 月壬子条には、その過程並びに大量の火薬などを高麗に頒布したことを詳述している。
- 28) 朝鮮半島にみられる倭寇の侵攻回数は、李領「高麗末期倭寇の実像と展開—『高麗史』の再検討によ

- る既往説批判—」（『倭寇と日麗関係史』東京大学出版会，1999 B）を参照。
- 29) 李領前掲論文。
- 30) 其國僧周佐寄書曰，惟我西海道一路九州，亂臣割據，不納貢賦，且二十餘年矣。西邊海道頑民觀釁出寇，非我所爲。是故朝廷遣將征討，深入其地，兩陣交鋒，日以相戰。庶幾，克復九州，則誓天指日，禁約海寇（『高麗史』卷133列伝第46 禡王2年（1376）10月条）。この史料からも，当時の日本政府（京都の北朝）は，倭寇の活動を北朝（幕府）の九州支配が完結していなかったことによると認識していたといえる。
- 31) 倭寇発生時代の背景については，日韓の研究者とも「四十余年が間本朝大に乱て外国暫も不静…」（『太平記』卷39「高麗人来朝事」）や注30の史料から，概ね日本の南北朝内乱期の九州地方の混乱を挙げている。
- 32) 森茂暁前掲著書。
- 33) 李領前掲論文1999 B。
- 34) この史料以外には，『高麗史』卷39恭愍王6年（1357）閏9月乙丑条・同7年5月辛亥条・同9年閏5月丙辰条・同12年4月己未条・同14年3月庚申条・『高麗史節要』卷30辛禡王2年（1376）7月条などを参照。
- 35) 関周一「朝鮮海域における倭人の活動—島と倭人—」（『8-17世紀の東アジア地域における人・物・情報の交流：海域と港市の形成，民族・地域間の相互認識を中心に』科学研究費補助金研究成果報告書，2004）は，詳細は述べていないがこれを倭寇の多様性と絡めて説明しようとしている。
- 36) 全羅北道群山説を唱える研究者もいるが，歴史地理的な環境から忠南舒川の可能性が一層高いと考えられる（李領「『庚申年の倭寇』の歴史地理学的検討」『港町と海域世界—シリーズ港町の世界史—』青木書店，2005）。ただ，どちらであっても本稿には支障がない。
- 37) 李領前掲論文2005。
- 38) この500艘と倭寇記事に数多くの馬がみられることを根拠に，田中健夫・高橋公明の両氏は倭寇＝高麗人主体説を唱えたのであった。本文で指摘したようにこの説を全面的に肯定する研究者は少ないが，日本側では現在でもこの説を肯定的に引用している。最近の関周一前掲論文2010でも，慶尚道・全羅道南岸を襲った倭寇は対馬・壹岐の人々を主体にしたが，京畿道周辺を襲撃した倭寇は高麗に抵抗した高麗人が多かったとしている。
- 39) 李領前掲論文2005。
- 40) 当初より九州地方から遥かに離れた京畿道海域を襲撃していることは，高麗の地域権力とのつながりを想起させてくれる。さらに京畿道海域に出没した倭寇は，山東半島にまで遠征したと考えられる。
- 41) 巨済島に居住をして永く和親を結ぼうというので高麗朝が居住を許した倭人が，忠清道の寧州・温水などを襲撃したことを述べている。『高麗史』のなかでは倭寇の主体に言及した稀な記事であるが，高麗側の衝撃の大きさが窺い知られる。
- 42) 関周一「明帝国と日本」（『日本の時代史11』吉川弘文館，2003）・関周一前掲論文2004。
- 43) 『高麗史節要』卷30辛禡王元年（1375）5月・7月条も参照。
- 44) 村井章介「南北朝の動乱」（『日本の時代史10』吉川弘文館，2003）。
- 45) 『牧隱文藁』13跋黄檗語録。この史料の詳細は，榎本涉前掲論文を参照。
- 46) 藤田明良「『蘭秀山の乱』と東アジアの海域世界—14世紀の舟山群島と高麗・日本—」（『歴史学研究』698，1997）。この藤田氏の研究は，当時の東アジア海域交流史において貴重な成果である。
- 47) 末松保和編『訓読史文〈巻之2-4〉』（国書刊行会，1975）。
- 48) 藤田明良前掲論文1997。この文書は，洪武3年（1370）10月9日付の明国中書省咨で，蘭秀山逆賊の関係者として拘束されていた高麗人高伯一の送還を高麗国王に通達したものである。
- 49) 文書の前半部は，蘭秀山の乱の様子（敗退まで）と林宝一の身辺について詳述している。
- 係昌国懸富七保住民。洪武元年正月二十四日，本保里長盧子中，租賃莽張百戸船一艘，雇募寶一等充梢水，裝運官鹽赴京。於斜浦修船完備忽有莽張百戸，到来対説，蘭山葉演三・長塗王元帥・秀山陳元帥等船，都下海了。教我快趕船来同打明州，令伊男張子安與寶一等行船，趕到招寶山，接見陳元帥，莽張百戸船敗陣前來，就一撥寶一等船隻於定海港守把。至三月初七日，有首賊陳魁四，提船等候

- 擱載大軍。至四月十八日到於崎頭，迎見吳都督軍船對敵敗退。
- 50) 明帝国の高麗政府への捜査・逮捕の依頼は次の史料が参照される。  
 中書省遣百戶丁志・孫昌甫等，來究蘭秀山叛賊陳君祥等。咨曰，君祥等積年在海作耗。大軍克平浙東之後，本賊既降，復叛，劫殺將官。已嘗調兵往討，其賊畏罪遁逃。今有明州人鮑進保自高麗來告，君祥等挈其黨，見於王京古阜，匿罪潛居王國，必所未知，撫以爲民。其賊詭計偷生，姦心實在。若使久居王國，將見染惑善良，爲患匪輕。忽然復歸其穴，則往來既無少阻。請將賊徒解來，明正其罪，庶絕姦惡。王命並其妻子及貨產以送，凡百餘人（『高麗史』卷42 恭愍王19年（1370）6月条）。
- 51) 冒国州の官吏趙觀光の墓誌名には、「蘭秀二山居民，悍勇善鬪，素習海事」とある。
- 52) 近藤浩一前掲論文。
- 53) 檀上寛前掲論文。
- 54) 昌国州蘭秀山盜入象山県作乱。県民蔣公直等集郷兵擊破之。初，方国珍遁入海島，亡其所受行枢密院印。蘭秀山民得之，因聚衆爲盜。至是入象山県，執県官，劫掠居民（『明太祖実録』卷32 洪武元年（1368）5月庚子条）。
- 55) 詳細は西別府元日「九世紀前半の日羅交易と紀三津『失使旨』事件」（『中国地域と対外関係』山川出版社，2003）をはじめ，渡邊誠「承和・貞観期の貿易政策と大宰府」（『ヒストリア』184，2003）・金恩淑「日本最後の遣唐使派遣と張保臯勢力」（『韓国古代史研究』42，2006）・山崎雅稔「新羅国執事省牒からみた紀三津「失使旨」事件」（『木村茂光編 日本中世の権力と地域社会』吉川弘文館，2007）を参照。
- 56) 842年の閩丈上筑前国牒状・885年の徐善行の新羅国執事省牒・870年の新羅国牒などは，新羅の公的権力と関わる地方勢力が牒状を作成し日本側と接触を試みた例である。
- 57) 『新增東国輿地勝覧』卷35 羅州牧・題詠条。
- 58) 『明太祖実録』卷75 洪武5年（1372）5月庚子条。
- 59) 『高麗史』卷42 恭愍王19年（1370）5月甲寅条。
- 60) 高麗の空島化政策については，村井章介前掲論文1997を参照。
- 61) 李嶺前掲論文2005は，倭寇が歩いた道は官道（駅路）であったため，高麗人の案内も不必要であったとしている。しかし，駅路の把握には多くの情報を必要としたと考えられる。
- 62) 田中健夫前掲論文。さらに田中氏は，高麗人主体の倭寇は，『高麗史』に数点であるが倭寇に賤民身分の水尺・禾尺・才人の参加がみられるのを根拠に，高麗国家に不満を持つ人々を構成員としたと論じている。
- 63) 浜中昇前掲論文。
- 64) 『高麗史』卷134 辛禰王8年（1382）4月条・同卷135 辛禰王9年6月条・同卷118 趙浚伝。
- 65) 『日本紀略』寛平6年（894）9月19日戊寅条にも，『扶桑略記』のような詳細な内容ではないが対馬島襲撃の様子が記されている。なおここでは，9月19日に新羅賊二百余人を打殺し諸国に軍士警固の停止を命じたとしている。
- 66) 山内晋次「9世紀東アジアにおける民衆の移動と交流—寇賊・反乱を主な素材として—」（『奈良平安期の日本とアジア』吉川弘文館，2003）。その他にも，旗田巍「10～12世紀の東アジアと日本」（『岩波講座日本歴史4』岩波書店，1962）・戸田芳実「中世成立期の所有と経営について」（『日本領土制成立史の研究』岩波書房，1967）・関幸彦「平安期，二つの海防問題—寛平期新羅戦と寛仁期刀伊戦の検討—」（『古代文化』41，1989）・生田滋「新羅の海賊」（『海と日本列島（2）』小学館，1991）・李炳魯「寛平期（890年代）日本の対外関係に関する一考察」（『日本学誌』16，1996）・石井正敏「寛平六年の遣唐使計画と新羅の海賊」（『アジア遊学』26，2001）・浜田耕策「王権と海上勢力—特に張保臯の清海鎮と海賊に関連して—」（『新羅国史の研究—東アジア史の視点から—』吉川弘文館，2002）・鄭淳一「寛平新羅海賊考」（『史観』164，2011）などを参照。
- 67) 浜田耕策前掲論文など。
- 68) 山内晋次前掲論文。
- 69) 鄭淳一前掲論文。
- 70) 9世紀後半の新羅海賊の全体像は，権恵永「新羅下代西・南海の海賊と張保臯の海上活動」（『対外文

物交流研究』海上王張保臯記念事業会, 2002)を参照。権恵永氏は、日本の博多津や対馬で新羅海賊が頻繁に出没したのは、張保臯の暗殺からこの時期にかけて海賊が大規模化・組織化されたためであるという。

- 71) 田中史生「『帰化』と『流来』と『商賈之輩』」(『日本古代国家の民族支配と渡来人』吉川弘文館, 1997)。彼らは、僧侶や技術者と交易者(海賊)という二重の顔をもって大宰府管内に居住していた。
- 72) 近藤浩一「南宗禅と新羅社会—張保臯との関係を中心に—」(『対外文化交流研究』7, 2007)。当代の西南地域の南宗禅寺院については、曹凡煥『羅末麗初禅宗山門開創の研究』(景仁文化社, 2008)・鄭東樂「新羅下代禅宗史の研究動向」(『韓国古代史探究』7, 2011)を参照。
- 73) 戸田芳実「平安初期の五島列島と東アジア」(『初期中世社会の研究』東京大学出版会, 1991)。
- 74) 上の史料15と同じ寛平期の新羅海賊の動向としては、寛平5年(893)5月に肥前国の松浦郡を襲い(『日本紀略』寛平5年5月22日庚申条), さらに肥後国の飽田郡に移動しその地の人宅を焼いている(同年閏5月3日庚午条)。また、その翌年の寛平6年(894)3月13日頃には辺島を襲撃しており(寛平6年3月13日丙子条), 4月14日には対馬島への来着が報告されている。このように行動範囲を少しずつ広げて移動を伴うのも、倭寇の行動と似ている。
- 75) 山内晋次前掲論文。
- 76) また西海岸沿岸部の交易活動拠点には、唐商人も頻繁に往来した様子が窺われる。『新增東国輿地勝覽』19忠清道沔川郡人物ト智謙によれば、樞城郡(沔川郡のこと)には高麗の建国に功臣があったト智謙家門がいたが、彼の先祖であるト学士は唐から新羅にやってきて沔川郡に居住しながら海賊を打ち払い百姓たちを集め保護したという。ト智謙の先祖は、唐と新羅を往来した海上交易に従事しながら相当な海軍力と経済力を築き、樞城郡地方で有力な豪族に成長したといえる(鄭清柱「豪族の台頭」『新羅末高麗初豪族研究』一潮閣, 1996)。
- 77) 例えば、朝鮮から日本に遣わされた使者宋希璟が記した『老松堂日本行録』には、1418年に倭寇が中国から拉致して来て対馬で暮した被虜人が、中国・日本・朝鮮語に堪能であり、最後は中国及び日本国の通事にのぼりつめたことがみられる(村井章介前掲論文1997)。
- 78) 倭寇の性格を解明するには、東アジア海域世界のシステムと倭寇が関与した各々の国家の形態に対する比較史的考察も必要である。本稿では検討できなかったが、高麗の国家形態と倭寇の関係についても今後は研究したい。朴宗基「高麗末の倭寇と地方社会」(『韓国中世史研究』24, 2008)・李在範「高麗後期の倭寇と海洋防御対策」(『李舜臣研究論叢』13, 2010)などの成果が参照される。

## Coastal Water and Waegu in East Asia

—Comparative Historical Study between Silla Pirate in the end of 9th century—

Koichi KONDO

### Abstract

Waegu which attacked Korean Peninsula from the middle of the 14th century to the 15th century was Samurai Group in the Middle Ages of the Kyushu Region of Japan. However, their action was being linked with the trend of Coastal Water in East Asia. Sea Power was prosperous in Coastal Water in the Late Koryo and the Late Yuan and Early Ming, and especially the Group participated in the Revolt of Ransyu Island had a close relationship with public power in Koryo and Waegu.

The activity of Waegu was performed under such a situation. Although Waegu's action spanned over the region of East Asia, since it was not in the free position beyond a state but marginal man as emphasized by the existing research, its contact was positively tried to Public power in the area it worked in order to conquer its own instability. This movement resembles the action of Silla Pirate in the 9th century.

**Keywords:** Waegu, Coastal Water in East Asia, Koryo, Samurai Group, Silla Pirate